

黎明期の神丘

ト部信臣¹⁾

Beginnings of the Kamioka village

Nobuomi URABE¹⁾

1. はじめに

今金町神丘は、キリスト教徒による開拓地として広く知られている。「北海道開拓秘録(若林 功, 1964)」にもややセンセーショナルにその開拓の過程が収められているが、本論では実際の神丘への入植が北海道の開拓政策とどのような関わりを持っていたのかを見ていくこととする。

2. 北海道殖民地選定区画後志国利別原野“中「トシベツ」原野”

北海道殖民地選定区画事業は、移民を入れる前に農業適地を調査、区画して全体計画に基づいて進めたところがこれまでの開拓政策と根本的に異なるものであった。調査を担当したのは札幌農学校第1期生の内田 潜, 柳本通義の近代科学を身につけた新進気鋭の者であった。この事業は明治19(1886)年から始まり、後志国利別原野は明治22(1889)年に実施された。利別原野は、上「トシベツ」原野, 中「トシベツ」原野, 下「トシベツ」原野に分けて報告されているが、神丘地区は、中「トシベツ」原野である。資料1に示す通り「地理」, 「土性」, 「植物」, 「排水」, 「用水」, 「運輸」の項目について調査結果が報告されている。

3. 犬養 毅外8名の土地貸下後志国利別原野“中「トシベツ」原野”

従来、志方之善, 丸山要次郎が未開の地を探検して神丘の地を探し当てたように書かれているものが多いが、実際は測量し、区画を終えた土地への入植であることを明記したい(資料1)。

当時の国会で発言力を得るには、大土地所有が最も確かな手段であるため、北海道の未開地に中央の政治家が食指を動かしてきたのであるが、神丘のイヌカイチもそのひとつであ

第1図 未開地貸付台帳
(北海道庁、明治19~27年)

¹⁾新十津川町立吉野小学校。Yoshino junior school, Shintotsukawa, Hokkaido, 073-13 Japan.

った。改進黨の犬養 毅外8名が明治24（1891）年3月12日後志国利別原野“中「トシベツ」原野”2025万坪の貸し下げを受けている。犬養 毅が代表であったため開拓期の人々は、ここを「イヌカイチ」と呼んでいた。犬養 毅、尾崎行雄と言え、薩長藩閥政治を鋭く批判した論客であったが、その彼らが薩摩閥の巣といわれた道庁を通して、大土地所有にのりだしたことは、注目に値する。第1図中の田中賢道とは熊本県自由党の領袖であり、一木富太郎は田中賢道の秘書である。土地の貸し下げ地は、まちがいなく開墾を終えたという成功検査を受けて、払い下げになるシステムになっていた。当時は、土地の貸し下げを受けても、開墾が思うようには進まないのが、現状であった。この貸し下げを受けた土地をどのようにして、開拓を進めるかが大きな課題となっている時に、志方之善等の動きが出てくる（殖民地撰定報文の10年後は殖民状況報文に詳しい；資料2）。

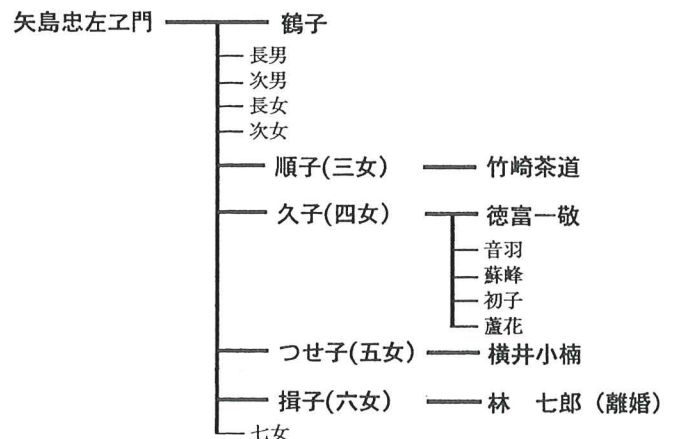
3. 志方之善、北海道開拓を志す

志方之善は、元治元（1864）年7月17日、父之裕、母ヨリの長男として熊本県山鹿郡来民町（現山鹿市）に生まれた。14歳の明治2（1869）年義兄長平を頼って神戸に出た。彼は神戸で英語の学習の後、陸軍教導団に入隊した。教導団には2年いたが、胃弱のため除隊した。失意のどん底に落ちた志方之善に救いの手を差し伸べたのは、彼の親族のひとり鈴木陸軍大佐であった。鈴木は、志方を新島襄に紹介し、同志社の普通校に入学させた。同級生の藤原直信に勧められて新島邸の家庭集会に参加。明治19（1886）年に新島 襄から受洗して同志社教会の一員となり、その1年後に伝導者を志して同志社神学校に入学した。明治23（1890）年同志社の創立者新島 襄は大磯で病に倒れ、志方之善等が看病をして尽くしたが明治23（1890）年1月23日息をひきとった。遺言は徳富蘇峰の筆で書かれた。

1月24日柩を京都に運ぶ列車の中で志方之善は、初めて徳富蘇峰に会い、「君のことは、遺言の中にもあったよ。」と声をかけられる。1月27日新島 襄の葬儀が行われ、志方之善は南禅寺から若生寺の墓地まで柩をかつぐ一員であった。葬儀には、京都府知事北垣国道も参列していた。北垣国道は、このあと北海道長官となり、貸し下げだけを受けて開拓の進んでいない土地を返還させたことで有名である。また、金原明善とも親交があり、貸し下げを受けて開拓の進まないところを犬養 毅に返還させて、そこを金原明善のものとしたことでも、直接神丘の黎明期に関わる人物である。「新島先生のなき同志社は廃屋も同然だ」と志方之善は、同志社を中退する。そしてキリスト精神に基づく北海道開拓に向かう決意を固める。北海道開拓を実現するために志方は、同郷の先輩である大宮教会の牧師大久保真次郎夫妻を訪ねた。大久保は、徳富蘇峰、蘆花の義兄である。志方の決意を聞いた大久保の妻の音羽は、荻野吟子に紹介状を書く。

4. 荻野吟子

日本女医第1号の荻野吟子は、嘉永4（1851）年に埼玉県大里郡妻沼町に生まれた。明治元（1868）年19歳の時、稲村貫一郎と結婚する。明治3（1870）年協議離婚。明治8（1875）年東京女子師範に入学。明治18（1885）年医籍に登録され日本で女医第1号となり、明治19（1886）年には海老名弾正から洗礼を受けてキリスト教徒となって、キリスト教婦人矯風会に参加



第2図 夫人覚醒運動にかかわった矢島家ゆかりの人々

資料1 北海道殖民地撰定報文（資料提供：北海道出版企画センター）

瀬棚郡上「トシベツ」原野

地理

四圍皆山脚ニシテトシベツ川ノ上流チボハツタリヨリ下流ベツクハカエマツツニ至ル左右岸ノ地之ヲ上トシベツ原野トナス其内較々廣キ野ハ「ビリカベツ」チユウシベツ「トシベツ」三川會合スル所ノ丘陵地乃チ其近傍砂金ノ埋没スル所ナリ其他ハ僅ニトシベツ川ノ屈曲間ニ散在スルノミ而シテ小川ハ左岸ニ位スル「サクルベシベ」シユフツナイ「チンクヒ」及「ル」トラシナイ等トス

面積

百五拾貳萬九千貳百六拾坪

樹林地

右肥沃ナル樹林地ナルヲ以テ耕作ニ適スル所ナリ

土性

土壤六寸乃至三尺ノ新沖積層平均二尺二寸余アリ層中上土ハ三寸乃至七寸ノ黒色腐植土下土ハ壹尺乃至二尺三寸ノ褐色砂性壤土ニシテ前陳三川合流ノ地方ハ土壤深ク地味モ亦膏腴ナリ然レトモ砂金探掘ノ爲メニ往々土地磯礫ナル處アリ

植物

近傍沿岸ノ樹林ハ概シテ樟木、樺、山胡、桃、桑、刺楸、白楊、樺、赤楊、菩提、樹、黃蘗、朴、サビ、ダ、カ、タ、ス、ギ、山、毛、櫻、桃、オ、ホ、バ、イ、ラ、ク、サ、割、寄、奴、草、款、冬、虎、杖、等ナリ而シテ河畔肥沃ノ地ハ草木概シテ生長佳良ニシテ樹ノ如キハ圓六尺乃至九尺アリ若ハ高五尺乃至六尺余虎杖ハ一丈五尺五寸アリ樹林ハ一段歩二十本乃至四十本許粗密アリ山邊濕地ハ枸骨科、蕁麻科ノ草木、蕁麻科ノ雜草類多シ

用水

水流ハ本支共ニ清澄ナルヲ以テ飲用ニ供スルモ可ナリ唯左岸ノ細流ハ水色微濁ノミ而シテ上流ヨリ引水スルトキハ灌溉ハ自由ナルヲ得ベシ

運輸

斯地ハ「トシベツ」川口ヲ距ル十八里拾貳町許ル「トシナイ」ヨリ東濱山越郡「クノスイ」ニ至ル五里三拾壹町許當時採金ノ際ハ専ラ道路ヲ「クノスイ」ニ開キ以テ相往來セリ「ル」トシナイ「チ」跡ユル細溪アリ茶屋川ト云フ蓋シ當時茶屋ヲ建設シタル所ナリト瀬棚「トシベツ」ヨリ「上」スルトキハ小磯舟ヲ以テ幸行スルヲ得ベシ後來西海岸「トシベツ」ヨリ東方「クノスイ」濱ニ道路ヲ開鑿セサルヘカラス若其道路ニシテ落成スルトキハ則チ始メテ運輸ノ便ヲ得ベシ

中「トシベツ」原野

地理

南北ハ「トシベツ」川左右兩岸ノ山脚ニシテ東ハ上流ベツクハカエマツツ及チンネハツタリヲ以テ上トシベツ原野ト界シ西ハ「メナ」及「フミル」イノ支川ニ由テ下トシベツ原野ト隣接ス地勢東西ニ長ク南北ニ狭シ唯其廣闊ナルハ同川左岸ノ「チイ」ダヤンヌベ「右」岸メナ地方ナリ其「フイ」ダウシナイ「パン」クハカエマツツ「ネ」イ「フ」イ「チ」ナイ「チ」ダウシナイ「ト」マムクシ「ベ」ンク「チ」ニ「ホ」ツナイ「メ」ナ等ノ支流ハ北方ノ山脈ヨリ流レ「カ」チ「マ」ナイ「ベ」ンク「チ」イ「ダ」ヤンヌベ「パン」ク「チ」イ「ダ」ヤンヌベ「派」川ハ南方ノ諸山ヨリ來リ地形丘陵濕地泥炭地等ノ別アリ蓋シ斯地ハ「トシベツ」河口ヲ距ル十一里余ノ上流ニ位ス

面積

九百三拾貳萬百五拾三坪

丘陵草原

七萬三千五百坪

百八拾六萬七千六百七拾三坪

三百七拾七萬六千三拾坪

七拾五萬坪

貳百八拾五萬貳千九百五拾坪

右丘陵及河岸ノ草林ニ原野ハ農業ニ適シ濕地モ亦排水後耕地トナスヲ得ベシ

土性

土壤ハ壹尺乃至四尺ノ沖積層平均貳尺七寸余層ノ上部ハ壹寸乃至六寸ノ茶褐色腐植土下壹寸乃至三寸五分ノ火山灰下部ハ七寸乃至貳尺四寸ノ砂性壤土或ハ粘性壤土其下層ハ赤色粘土或ハ砂礫トス蓋シメナ丘陵ハ火山灰層極メテ薄ク五分乃至七分ナリ而シテ卑濕地ハ三尺乃至九尺ノ沖積層平均八尺其積層ハ壹尺ノ鹽質土貳尺ノ泥炭質壤土三尺ノ泥炭下三尺ノ青色軟性粘土ニシテ或ハ貳寸ノ鹽質土三尺六寸ノ泥炭質壤土下九尺以上ノ泥炭或ハ上部ヨリ直ニ泥炭ナル所アリ但シ泥炭ハ朽腐セリ又積層中六寸乃至八寸ノ火山灰アリ

植物

近傍沿岸ノ樹林ハ概シテ樟木、樺、山胡、桃、桑、刺楸、白楊、樺、赤楊、菩提、樹、黃蘗、朴、サビ、ダ、カ、タ、ス、ギ、山、毛、櫻、桃、オ、ホ、バ、イ、ラ、ク、サ、割、寄、奴、草、款、冬、虎、杖、等ナリ而シテ河畔肥沃ノ地ハ草木概シテ生長佳良ニシテ樹ノ如キハ圓六尺乃至九尺アリ若ハ高五尺乃至六尺余虎杖ハ一丈五尺五寸アリ樹林ハ一段歩二十本乃至四十本許粗密アリ山邊濕地ハ枸骨科、蕁麻科ノ草木、蕁麻科ノ雜草類多シ

排水

「トシベツ」川左岸卑濕地及「ト」マムクシ「ン」濕地ハ排水ヲ要ス地勢漸ク東西ニ傾斜スルヲ以テ其方

用水

向チ取リ排水溝ヲ掘設ヒサルヘカラス否ラサレハ却テ河水ノ浸入ヲ催スコアリ

トシベツ川ノ右岸ハ小流概シテ清澄左岸ハ之ニ反ス殊ニメナ川ハ冷清夏時獨飲スルハ頗ニ苦熱ヲ去リ身神爽快ナリ其温度ハ攝氏九度二許ナリ丘陵ハ灌溉ニ不便ナルモ其他ハ自由ナリ

運輸 此地トシベツ河口ヲ距ル水路拾壹里拾四町許メナトニ至ル六里許將來道路ノ開設ヲ必要トス若シ下流ノ馬駒内ヨリ新道ヲ開通スルトキハ此地ニ至ル三里半許ナリ

下「トシベツ」原野

地理

東ハ中トシベツ原野トメナ「フミルイ」ニ界シ西ハ瀬海ニ瀕ス南北ノ兩端ハ山趾ナリ之ヲ下「トシベツ」原野トス地形東西ニ長ク南北ニ短シ其小川ハ「ユウブチ」「バシクチ」「マコナイ」「トマンベツ」「チヤチ」「マコナイ」等トス「マコナイ」ハ「トシベツ」川支流メナニ亞クノ清川ナリ「チヤチ」近傍ハ丘陵ニシテ延テ海濱モナイニ至ル而シテ太「檀川」上流水路四里三十二町許ニシテ兩岐トナル處ヨリ下流コモナイニ至ル間僅少ノ樹林原野アリ太檀郡ニ屬ス

面積

五百貳拾貳萬五千九百四拾坪

内

九拾五萬四千八百六拾坪

四拾壹萬九千貳百八拾坪

貳百貳拾五萬八百坪

五拾五萬坪

五拾五萬坪

五拾五萬千坪

右草原林地ハ農業ニ丘陵ハ牧場ニ適ス但シ湿地ハ排水ヲ要ス

土性

土壤ハ各處多少ノ厚薄アリト雖モ河畔ハ壹尺三寸乃至六尺ノ新沖積層平均三尺五寸余アリ土部ハ三寸乃至七寸ノ礫質土或ハ腐植土下壹寸五分乃至二寸ノ火山灰下部ハ壹尺乃至五尺余ノ泥炭質壤土或粘性質土其下軟和ナル粘土トス卑濕地ハ六尺乃至九尺ノ沖積層或ハ泥炭層平均八尺以上アリ其上部ハ五寸乃至八寸ノ礫質土下五寸乃至四寸余ノ火山灰中部ハ二尺九寸乃至三尺八寸ノ泥炭質壤土下部ハ二尺乃至四尺以上ノ泥炭ナリ然レトモ中部往々粘性質土ヲ挿夾スルアリテ下青色粘土ナルアリ而シテ「チヤチ」近傍ノ丘陵ハ二尺三寸乃至二尺八寸平均二尺四寸余ノ沖積土土中上部ハ壹寸五分乃至三寸ノ腐植土下壹寸乃至二寸ノ火山灰下部ハ二尺余乃至二尺三寸ノ粘性質土以下粘土ニシテ色赤白アリ但赤ヲ多トス

植物

檜、樺、赤楊、水楊、黃蘗、刺楸、七葉樹、山胡椒、朴、菩提、樟、木、檉、栗、辛夷、黃櫨、樹、カ、ダ、ス、ギ、桃、葉、衛、矛、サ、ビ、ツ、土、常、山、水、臘、木、等、ノ、雜、林、ニ、シ、テ、樹、下、割、寄、草、草、ヤ、マ、ツ、ア、ツ、藍、澤、瀉、觀、音、蓮、シ、モ、ツ、ケ、サ、ウ、ヲ、ホ、バ、イ、ラ、ク、ヤ、虎、杖、莎、草、ク、サ、フ、ヅ、エ、ア、ニ、ウ、萩、蕨、艾、欸、冬、筍、等、ノ、雜、草、ト、ス、樹、間、往、々、獨、藤、桃、山、蒲、萄、ノ、纏、繞、ス、ル、ア、リ、而、シ、テ、土、地、ニ、因、リ、テ、林、相、ヲ、區、別、セ、ハ、概、シ、テ、河、畔、ハ、檜、樺、濕、地、ハ、赤、楊、矮、小、繡、丘、陵、及

山趾ハ菩提、樹、樺、木、檉、栗、刺、楸、七、葉、樹、平、原、ハ、萩、芭、サ、フ、ヤ、等、ニ、シ、テ、林、草、ノ、地、殆、ン、ト、第、ノ、ア、ラ、サ、ル、所、ナ、シ、又、林、中、ノ、大、樹、ハ、圓、八、九、尺、ノ、刺、楸、黃、櫨、七、葉、樹、樺、四、五、尺、ノ、桑、壹、丈、余、ノ、檜、等、ア、リ、雜、草、ハ、高、六、尺、ノ、筍、壹、丈、余、ノ、割、寄、草、草、ア、リ、テ、之、中、ト、シ、ベ、ツ、原、野、ニ、比、ス、レ、ハ、生、長、佳、良、ナ、リ、樹、林、ハ、壹、反、步、四、五、本、乃、至、四、五、十、本、許、粗、密、ナ、リ、マ、コ、マ、ナ、イ、ノ、溪、流、サ、イ、モ、ス、シ、ナ、イ、ヨ、リ、山、足、ニ、及、ン、テ、栗、樹、多、シ、土、人、秋、季、一、日、壹、斗、五、升、許、ヲ、採、拾、ス、ト、云、フ

排水

「ユウブチ」「コクヤケ」「イチブン」等ノ濕地ハ田圃トナサント欲セハ必ス排水ヲ要ス其放水ハ別ニ東西ニ溝渠ヲ穿テサルヘカラス否ラサレハ「トマンベツ」近傍ハ本川ノ屈曲甚シク動モスレハ逆流スルノ恐レアレバナリ

用水

右岸ノ細流小川ハ概ネ清澄飲料トナスモ不可ナシ殊ニ「マコナイ」ハ水流美清潔深淵ノ游魚モ亦能ク窺フヲ得ヘシ現ニ福井縣移住民ハ日常之ヲ飲用セリ而シテ灌溉ハ固ヨリ自由ナリ故ニ灌溉ノ利ヲ計ンヨリハ寧ロ水害ノ憂ヲ除クニ如カス

運輸

此地ハ河口ヲ距ル五里許間ノ沿岸ニシテ舟楫便ナリ「マコナイ」移民地ヨリ三本杉ニ至ル道路アリ一里二十余町許他日山越郡クノスイニ通スルノ車道ヲ開設スルニ至ラハ交通運輸ノ便ヲ得ヘシ太檀川沿岸原野ニ至ル道路ハ「トシベツ」川「トマンベツ」ヨリ全川コモナイノ下流ニ出ツル僅ニ半里許却テ太檀ヨリ便利ナルベキ乎

説教所、駅通及ヒ旅人宿、小売商等アリ埼玉郡落ハメツ、ハカイマツ等ノ加藤政之助開墾地ノ称ニシテ戸数九十有リ珍古辺ハ最東ノ部落ニシテ戸数二十有リ旅人宿、郵便立所等アリ稲穂嶺ノ麓ビリカベツニハ満庵アリ戸数七十有リ巡査駐在所アリ又今金部落ノ西方区画地内ニ在ルヲ意満奴留意部落ト云ヒ四五十戸其北ノ金原農場ニ三十四戸アリ利別川南岸大茶羅津辺部落ハベンケオイチャヌンベ川ニ沿ヒタル樫村及ヒ白石等ノ開墾地ニシテ六十有戸小茶羅津辺ハベンケオイチャヌンベ川ノ南金原開墾地ニシテ五十有戸アリ其他河岸各所ニ青木、宮崎、野本、西田等ノ開墾場散在シ各々少数ノ戸数アリ

農業 明治二十七年以降ノ開拓ナレトモ原野曠漠地味膏腴ナルヲ以テ日ニ月ニ進歩シ明治三十一年末ノ調査ニヨレハ既墾地八百六十八町四反歩アリ一戸平均作付約二町一二反歩ニシテ最も多ク作ルモノヲ五町歩内外ナリトス作物ハ蕎麥、裸麥、黍、蕎麥、稗、馬鈴薯、大豆、小豆、紅豆等ヲ重モトナス蕎麥、大小豆、紅豆ヲ販売シ其外ハ自家食料ニ供セリ耕鋤ハ倒木樹根ノ為メ未タ馬耕ヲ用ユル能ハス自作小作ノ割合ハ小作者二百七十有戸自作者百五十有戸タリ小作料ハ未タ歛下年期中ニ属シ未定ノモノ多キヲ以テ其實際ヲ詳カニシ難シト雖モ概ネ一反歩ニ付七十錢乃至一円迄ノモノナラン明治三十一年ニ於ケル本村ノ農産物及作付反別ヲ示セハ

種類	作付反別	收穫高	普通一反歩
蕎麥	一、九五〇反	二、二四〇石	一、四〇〇石
裸麥	八九五	一、五六六	一、七〇〇
蕎麥	七一五	六九四	一、五〇〇
蕎麥	八五五	三五九	二、〇〇〇
稗	六二五	三七〇	四、〇〇〇
大豆	五五二	二八七	一、五〇〇
玉蜀黍	三四五	三二八	二、〇〇〇
小豆	四八五	二一六	一、二〇〇
紅豆	二五二	一一三	一、五〇〇
小麦	一三五	二二三	一、〇〇〇
大麦	八〇	一六四	一、五〇〇
蕎麥	二五	五二五	二、一〇〇
麻	一三	二、三五六	一八一貫
馬鈴薯	六〇〇	二、四七二	五〇石

備考 本年收穫ハ八月洪水ノ為メ秋作ハ凡六分ノ減取ナリ一反歩当リ收穫ハ平年ノ見込取穫ヲ掲ケリ

本村ニ八十有戸ノ大地積ヲ有スルモノアリ各農場利別川ノ兩岸ニ連続シ盛ニ開墾ヲナセリ小作法ハ各農場ニヨリ多少其趣キヲ異ニスレトモ多クハ土地分与法ニ依リ可成資本ヲ節シ且ツ小作人ニ永住心ヲ起サシメントス左ニ其概況ヲ示ス

加藤農場ハ加藤政之助ノ開墾地ニシテ反別八百三十四町四反歩利別川ノ北岸上ハカイマツブヨリメツ川ニ亘ル大地積ヲ有ス此地元大養穀等ニ貸付セシ土地ニシテ返地セシナリ現今ハ成功地百五十九町余歩小作人九十七戸アリ小作法ハ一戸ニ五町歩ヲ配当シ蕎麥開墾料及ヒ米増ヲ貸給セス成功ノ上ハ其情況ニヨリ成功地ノ六分乃至八分ヲ分与ス開墾中ハ歛下五ヶ年ヲ与ヘ小作料ハ四等ニ別チ一反歩ニ付三十錢乃至一円トス地味ハ樹林地卑湿地相交リ概シテ肥沃ナレトモ卑湿地ハ大排水溝ヲ穿チ乾燥セシ後ニアラサレハ耕作シ難シ全地成功ノ期ハ尚遠シト云フベシ

北海道殖産農場ハ利別川ノ北岸宇チブタウシナイニ在リ總反別六百六十六町余歩アリ会主今村藤次郎専心之レヲ經營シ目下成功地八十三町歩小作人四十戸アリ小作法ハ開墾費トシテ一反歩ニ付金二円ヲ与ヘ且ツ三ヶ年ノ歛下ヲ付ス而シテ小作人配当全地ヲ成功シタルトキハ無償ニテ一町二反歩ヲ讓与スル事ヲ約ス貸付地内ニ戸長役場、郵便局、商店等アリ本村ノ中心ナリトス

青木農場ハ利別川南岸ニ在リ丘陵ニシテ卑湿地ヲ交ユ瀬棚村ノ高野泰次郎ノ貸付地ナリ現在小作人七戸成功地十二町ニシテ昨今ノ着手ナリトス

利別農場ハ東京市樫村清徳外四名ノ共同事業ニシテ利別川南岸ベンケオイチャヌンベ川ニ沿ヒ卑湿地多ク總反別七百二十町九反歩トス明治三十年ノ貸付許可ニ係リ現在小作五十二戸成功地百三十有町歩アリ本農場ノ小作法ハ他農場ノ如ク小作人ニ土地讓与ヲ約セス道路排水總テ農場主ニ於テ施設シ開墾中ハ小作人ヘ米増、農具料ヲ貸与シ一反歩ニ付二円ノ開墾料ヲ給シ歛下三年ヲ附ス本地ハ其大部分ハ湿地ナルヲ以テ数千間ノ大排水溝ヲ設ケサル可ラス其起業費ヲ要スル巨額ニ事業頗ル困難ナルヘシ

南金原開墾場ハ静岡県人金原明善外一名ノ事業ニシテ利別川南岸ベンケオイチャヌンベ川筋一帯ノ地ナリ反別二百六十四町二反歩明治三十年ノ貸付ニ係ル樹林地卑湿地相半シ樹林地ハ肥沃ナレトモ卑湿地ニハ泥炭地ヲ交エ大改良ヲ要ス小作人ニハ一戸四町歩ヲ割付ケ開墾中ハ米増ヲ仕送り全地成功ノ上ハ開墾料トシテ金四十八円ヲ給与シ猶一町六反歩ハ無期小作料ヲ徴取セサル契約ナリ現今ノ成功地八百六十二町歩小作五十一戸アリ当開墾場ハ事業著シク進歩シ其全地成功ヲ見ル或ハ予期ヲ待タサルヘシ

白石農場ハベンケオイチャヌンベ川ノ上流利別農場ノ東南ニ連リ總反別三百二十四町八反歩アリ愛媛県人白石弥一外一名ノ事業ニシテ現今小作七戸成功地十五町歩アリ小作法ハ一戸ニ五町歩ヲ配当シ成功ノ上ハ二町五反歩ヲ小作人ニ讓与スルモノトス

西田農場ハ利別川ノ南岸ノ西端ニシテ全地殆ント卑湿地ナリ瀬棚郡梅花都村西田元吉ノ貸付地ニシテ總反別二百二十二町七反歩明治三十年ノ貸付ナリ現在小作七戸成功地六七町歩昨今事業ニ着手ス小作人ニハ成功地ノ七分ヲ小作人ニ讓与スル契約ナリ

北金原開墾場ハ利別川北岸区画地ノ北端ニシテ概ネ高台地ナリ總反別百七十五町一反歩静岡県人金原明善外一名ノ事業ニシテ明治三十年ニ着手シ目下小作人三十戸成功地百三十三町歩アリ小作法ハ南金原開墾場ニ似タリ

右ノ外南岸ニ竹田伝五郎百二十町歩加藤重兵衛百二十九町余歩ノ貸付地アレトモ未タ事業ニ

着手セス其他野本矩正、田中啓造、古畑治三郎、松前譲、細小路熊次郎、須田栄治等ノ十万坪乃至二十万坪ノ貸付地アリ皆三四戸ノ小作人ヲ入レテ開墾ニ従ヘリ小作法ハ概ネ前記大地積開墾者ト略ホ相似タリ

馬 全村ニ馬匹六十頭アリ

商業 明治三十年戸長役場設置以來商賈來住シ目下木綿類、荒物、米増及雜貨ノ小売店五六アリ皆瀬棚市街地ヨリ商品ヲ仕入レ村民ニ供給ス物貨ハ皆馬背ニ由テ輸送スルヲ以テ頗ル不廉ナリ村民ハ重ナル品物買入レハ瀬棚市街ニ出ツルヲ常トス

木材薪炭 木材ニハ椴角材及ヒ榆、櫟等ヲ枕木トシテ出ス椴角百石ノ價凡七八十圓雜木角ハ四五十圓ナリ薪炭ハ村民自ラ之レヲ採リ薪一數ニ付一圓炭一俵三十四五錢位ニ當レリ

鑛業 利別川上流ニハ砂金ヲ産ス昔時箱館奉行ニ於テ人夫二十餘人ヲ遣シテ採掘シタリシカ長州藩征伐ノ頃廃業セリト云フ今其地ヲ元金山ト稱セリ現今ハ利別川支流サツクルヘシベヨリカニカンヌブリノ麓ニ亘ル利別川兩岸一帯ノ地ハ東京市兩宮敬次郎ノ砂金採拾借地ニシテ一時盛ンニ採取セシカ近年大ニ衰退シ昨今ハ僅カニ二十餘人ノ之レニ從フモノアルニ過キス其産額スル甚タ多カラス一ケ年凡二貫目内外ナリ又ビリカベツ、ニセウンベツニ跨リ満掩鑛アリ函館ノ田中正右衛門ノ借地ニシテ現今數百人ノ坑夫ヲ使役シ一ケ年ノ採掘高凡百四十二三萬斤ト云フ鑛山ヨリ胆振郡山越郡國縫マテ本軌ヲ敷設シ日々幾十輛ノ台車ヲ以テ搬出セリ其他利別川左岸ニ於テ満掩鑛右岸ニ於テ金鑛ノ試掘許可ヲ得タルモノ各二ケ処アリ

地価 土地ノ売買未タ少キヲ以テ精確ナル調査ヲ為シ難シ普通見込價格ハ一反步ニ付凡五六円乃至十円ヲ最高トスルカ如シ

生計 村民中三四ノ商人ヲ除クノ外ハ皆農ヲ以テ生業トナス移住ノ日尚淺キヲ以テ生計ニ余裕アルモノナシ殊ニ明治三十一年及三十二年ノ水害ニ罹リ沿岸低地ニ在ルモノハ頗ル困難ニ陥リ人氣大ニ阻衰セリ農民ノ副業トナスハ只養蠶業アリト雖モ僅々十四五戸ノ之レニ從フニ過キス皆野桑ヲ以テ飼育シ昨三十一一年ノ收穫ハ繭五石一斗三升ナリ薪炭材ニ富ムモ海岸ヲ距ル事遠クシテ運搬ニ困シ得失相償ハス冬期ハ只伐木ヲナシテ開墾ノ準備ニ從事スルノミ婦女子ノ如キハ全ク休業ノ姿ナリ

風俗人情 農民ハ性質稍素朴ノ方ニシテ民情穩カナリ利別川北岸ノ部落ニハ僅少ノ椗屋ヲ見ルモ概ネ茅屋ナリ南岸ハ全ク掘立小屋ニシテ一見新移ノ農民タルヲ知ル

教育 稚父多内ニ一ノ尋常小学校ヲ置キ埼玉部落、利別農場等三ケ所ニ簡易小学校ヲ設ケリ然レトモ区域広ク通學不便ナルヲ以テ尚二ケ所ニ増設ノ計畫アリ簡易小学校ニハ重ナル開墾者ニ於テ多少ノ寄附金ヲナスモノアリ教育事業ハ未タ甚タ不完備ヲ免レス

衛生 村医一名ヲ置キ稚父多牛ニ在リ飲用水ハ井水又ハ川水ヲ用フ卑湿地ノ水ハ飲用ニ堪ヘサルヲ以テ概ネ利別川ヲ用ユ

社寺 未タ公ニ届出タル神社ナキモ各部落ニ社祠アリ又秩父多牛ニ真宗ノ説教所一ケ所アリ

し、風俗部長として活躍していた。明治23（1890）年矯風会は「婦人の議会傍聴禁止撤回陳情書」を提出。神聖な国会に女性が入ると汚れるので議会に入することを禁止しようとの提案に猛然と反対運動を起こした。この運動が功を奏して国会開設時にはこの項目は撤回されていた。この矯風会の会長は、徳富蘇峰・蘆花らと親戚であった矢島^{かじこ}揖子であり（第2図）、メンバーの中に佐々城豊寿がいたので、大久保音羽婦人は志方之善を荻野吟子に紹介したのである。佐々城豊寿の娘信子は国木田独歩と結婚したことは広く知られている。佐々城家は、仙台で医者をしていて伊達一族が大勢北海道に移住することの中心になって働いたので広い人脈を持っていた。特にクラークの教えを受けた札幌農学校の卒業生は、キリスト教徒の結びつきで固いものがあつた。明治20年代前半（1890年前後）は、熊本、横浜、札幌でのキリスト教の活動が目立つが、その具体的な姿をこの矯風会の動きに見ることができる。大久保音羽婦人としては、単に北海道開拓の情報を得る便宜を図るつもりが、事態は予想しない方向に向かった。

5. 志方之善と荻野吟子との結婚

荻野吟子40歳。日本女医第1号で名声もあり、実力もある。一方、志方之善26歳。同志社神学校の学生。この2人が結婚したのが明治23（1890）年11月25日。周囲の人々はアッと驚いた。

6. 志方之善・丸山要次郎のインマヌエル入植

明治23（1890）年、志方は、北海道開拓の構想が固まると同志社神学校の先輩の小北寅之助牧師を訪て熊本県自由党首田中賢道に紹介してもらうようお願いした。小北寅之助の義兄が田中賢道であつたので話は早かつた。田中賢道は、丁重な紹介状を犬養 毅宛に書いた。志方はこれを持って犬養 毅事

務所を訪問した。応対に出た一木富太郎秘書は志方に会ったがこの若者に開拓が出来るかと一抹の不安があったが田中賢道の紹介状もあるしむげに断ることもできないので、仮契約を結び現地を見たうえで本契約を結ぶ方策を取った。明治24（1891）年5月、志方之善（27歳）と丸山要次郎（17歳）は、横浜港から出航して、瀬棚の梅花都港に上陸した。それから利別川を逆上り、目名川が利別川に注ぐ地点の左岸に落着くことにした。ここに平成3（1991）年神丘百年を記念してイチイの木で史跡標柱を建てた。横浜を出航して十数日が経過していた。2人は、開墾に取りかかったが、慣れない作業のために思うようには進まなかった。落^ふや笹の子等を塩漬けにし、鮭・鱒などを貯蔵した。犬養毅事務所と本契約を結び、キリスト教徒の移住を促進するために、志方之善はいったん京都に帰り、17歳の丸山要次郎だけが現地に残る事になった。要次郎は、木彫の作品を瀬棚に売りに行ったり、1合の米で2週間食いつないだり、40日間も落の塩漬けで飢えをしのいだりして、越冬した。翌明治25（1892）年春、志方は母しの（70歳）姉しめ（32歳）、同志の原田策郎、笹倉七郎、松田弥三郎等と揃って入植した。しめが中心になって開墾作業を進めたために大いにはかどったという。

7. 天沼家の入植

埼玉県幡羅郡長井村の天沼恒三郎らは、当時最も一般的な、関係書類を役所に提出して土地貸し下げを待つという方法を取った。そのために、役所に提出する書類は膨大だがなかなか土地貸し下げ決裁が出ないという北海道の開拓政策の悪弊に遭遇した。天沼恒三郎が役所に提出した書類は下記の通り。（1）北海道入植のための「団体成業規約書」（2）北海道移住開拓願書（3）天沼家の戸籍証明書（4）太櫓郡太櫓村官有地貸付願書（5）北海道団結移住開拓志願につき準備手続書（6）北海道移住開墾事業希望につき嘆願書

8. 山崎家の入植

山崎家は、明治26（1893）年に山崎六郎衛門が渡道して以来現在まで続く神丘の“旧家”のひとつである。入植には以下のようないきさつがあった。

北海道の鉄道は、明治20年代（1890年前後）石炭を求めて伸びて行くが、北関東の鉄道は繭を求めて伸びる。明治25（1892）年関東平野から日本海側に抜ける碓氷峠トンネル工事が完成したため、今までこの峠越えを一手に引き受けていた鉄道馬車会社は解散する憂き目にあった。社長の大越米吉は、同時に高崎を拠点に組員400人を擁する博徒の親分であった。ここで身の振り方を思案していた時に天沼恒三郎から神丘に入植しないかとの誘いが山崎六郎衛門にあり、六郎衛門は家族とともに渡道したのであった。

その当時の様子を、山崎六郎衛門の三男・山崎喜三郎（故人；渡道時は8歳）が自ら語ったものが録音テープとして残っている。慎ましい生活の中、信仰一筋に生きてきた人生が語られており、当時の様子がよくわかる第1級の資料なので、今回ご子息山崎淳平氏のお許しを得て、以下に資料3として全文を紹介することとしたい。本回想録は、昭和37（1962）年に今金の五男淳平氏宅にて、山崎喜三郎の喜寿祝いの席で息子の嫁と孫の前で語ったものである。文章化の作業に当たっては、録音音声そのものを文化財資料と考え、極力話者の発音を復元することにしたため、現在では差別的用語とされるものや、方言および口語表現のために読みにくさを伴う部分も一部にみられるが、純粋な資料の記録・公開という観点からご容赦願いたい。また、（ ）内の注と小見出しは便宜上筆者がつけた。

資料3 山崎喜三郎氏の回顧録

賛美歌87番

87番の賛美歌をみんなで歌います。この賛美歌は、私の父、山崎六郎衛右門が、群馬県高崎の大越米吉という人に導かれてキリスト教の信者になったのですが、その大越さんの大好きで、いついつも愛唱していました。お宅に伺った時、これを掛け軸にして床の間に掛けてありました。その導かれた父が、やはりこの87番（恵みの光）を常に愛唱していました。3代目の私が父に習っても、この歌が一番好きで常に歌ってきました。で、この賛美歌をみんなして歌ってもらいます。人生わずか50年。70歳は古来稀なりと言われてきましたが、私は神様のおん守りの中に、その稀なる70歳を突破して、しかも喜の寿と言われる77歳の今日まで生き長えしましたことは神様の深いおん恵みによるものとして深く感謝しております。

賛美歌87B

「めぐみのひかりは わがゆきなやむ
やみ路を照らせり、 神は愛なり。
われらも愛せん あいなる神を、

うき雲おおえど み顔の笑みは
さやかに照りいず、 神はあいなり、
われらも愛せん、 あいなる神を。

うれしいのときにも のぞみをあたえ、
なぐさめたまえり、 神はあいなり。
われらも愛せん、 あいなる神を。

ものみなうつれど めぐみのひかり、
とわにぞかがやく、 神はあいなり。
われらも愛せん、 あいなる神を。」

北海道開拓の立志

思い返しますればまる70年。猛獣の熊をはじめ、あらゆるけものが生息し、大木が鬱蒼と生い茂って日中でも太陽をはっきり見ることのできない、全くの原始林であったインマヌエルの地に入植しました。

その当時、交通が如何に不便であったかを申しあげれば、高崎からの手紙は20日以上もかからなければきませんでした。時には、ずっと後から出した手紙が先についたり、また、ある時は、少しまぐれた手紙は、半年以上もかかって配達されたこともありました。

私は明治19年6月14日群馬県碓氷郡坂本という小さい町に生まれたのであります。父が私たち数多い子どもたちの将来を思い、北海道開拓の志をたてたのであります。さらに、大越翁が「開拓の当初は、とてもとても困難が伴うのだが、将来は必ず子どもたちをみんな近くに家を持たせ、罪のない農業を楽しくできるのだから速やかに渡道しなさい。必ず援助の手は続ける。」とのお言葉。父は、実父以上に信頼しておった大越さんの激励の言葉に少しの躊躇もなく、断然、渡道を決行したのであります。

北海道に向かって

それで、明治26年5月半ば高崎駅から乗車し、東京の上野着し、当時有名であった「がんなべ」という食堂で昼食をすませ、かけあし同様に動物園その他を見物して、夕刻、新橋駅から横浜に着いたのであります。ところが、北海道行きの汽船がないので4日も滞在致しました。ようやく、「山城丸」というかなり大きな汽船が函館行きというので、ただちに乗船致しました。幸い、好天に恵まれ、波もなく、仙台沖の金華山、くじらの潮を吹くなどを眺め塩釜港に一泊し、翌々日函館に投錨しました。函館に上陸し、山田という旅館に投宿し、ところがここでも、また、瀬棚行きの汽船がないので3日も滞在いたしました。

回漕店に交渉の結果、寿都行きの後志丸を特に瀬棚につけてもらうことに話が決まり、いざ上船と波止場に行き、^{はし}船に足をかけたとたんボーと汽笛一声。その後志丸は出帆してしまいました。船頭が如何に懸命に漕いでも、もうあの船には追いつけないというので、私たちはいったん宿に引き返しました。それは、旅館の番頭が不注意のため出帆の時間を間違えておったのであります。さあ大変、こちらの回漕店から江差の回漕店に電報を打ってもらい、私たちの着くまで待ってもらうことにして、二台の馬車を借り切り私たち親子7人と父が2年ほど使用していた野上英満（21歳）奉公人と、現任今金の街の由浅食堂の先代由浅為太郎（22歳）の青年と同勢9人が2台の馬車に分乗し、五稜郭、亀田、桔梗、七飯と一気に走らせ、元の本郷にて馬を取り替え、あの険しい中山峠も無事に越し、江差間近になって日が暮れてしまいました。江差の灯がちらり見え始めたとき、港で汽笛が鳴

りました。これを聞いて、また、乗り遅れたのでないかと一同大きな心配をしました。それでも、駆けつけてみましたが、その船は入港したばかり。さっそく船に乗り込み一夜をあかし、翌日午後1時ころ三本杉に上陸いたしました。

瀬棚での生活

当時瀬棚の町にはアイヌの人の家と合計30戸ほどの家よりなかったのであります。商店としたものは、三本杉に「山に一ダ（屋号）」という極貧弱な雑貨商がただ一軒、旅館としたものは会津の街に山一大島勘左衛門というただ一軒。その主人勘左衛門さんには何かと便宜を図っていただき、随分お世話になりました。そして、父たちは、わらじに足をかため、各々が、縄、^{むしろ}蓆、道具、食料、寝具などを背負いまして4里の道をインマヌエルの地に小屋掛けに上ったのであります。

残ったのは母と8歳になる私と弟と妹の4人でしたが、何分にも旅館には座敷としたものは2間しかないので、長く私たちを置くことはできないというので、主人がアイヌの空き家を借りてくれました。戸じまりのない、すごいあばら家に10日あまりも住まったのであります。そうしておるうちに、たちまち私がアイヌのコスポと仲良の友達になってしまい、ある日私がマッチを持って遊びに行き、コスポと2人で風よけにしたあった丈の高いドンコ（イタドリ）、これを細かく折り、火をつけ始めた時にハポに見つかり大目玉をくらい逃げて帰りました。ハポというのはお母さんのこと、コスポというのは少年のこと、青年のことはヘカツ、女子青年のことはメノコといいました。そのメノコが結婚すると口に入れ墨をするのが、アイヌの風習でありました。そのハポは、酋長の連れ合いでもあったのか、とくにピーンとはねあがった入れ墨をし、ものすごい体格のいい、一見鬼のように思われる。そのハポが私の後を追いかけるようにして母のもとにきて、ことばは分かりませんが、「子どもにマッチを持たせ、危ないでないか。もし、火事になって小屋が焼けたらどうするか！」との意味を大きな声でどなりつけました。母は恐ろしさのあまりぶるぶるふるえながら平身低頭、両手をついて平謝りに謝罪したのであります。これを見て私は、「ああ、悪いことをした。母をこんな目に合わせて本当に済まなかった。」と後悔しました。

インマヌエル（神丘）に向かって

さあ小屋もできた。荷物もだいたい運んだ。「さあ、行こう！」と父は、適当な荷物を背負い、清太郎は3歳になった妹を背負い、母はわらじの履き方を知らないのので、父に履かせてもらい、おまけに臨月の間近い大きなお腹をかかえながら、トボトボと歩行しました。丹羽さんのお宅の付近までは、どうにか道路として形づくられてありましたが、それからこっち、一里あまりは、僅かに笹を刈り分けただけ。さかさ川、フシコ、メナ、チョポシナイと4本の川にはどこにも橋がかかっていません。こちらの岸の木を切り倒し、向こう岸に渡しその上をかるうじて渡り、ようやく着いた所に、前にも後ろにも垣根がなく寝ていて月も星も見ることができぬ笹ぶきの拝み小屋。母は感極まってか、声をだして泣きだし、何かと父に不平をつぶやくのであります。なかなか小屋の中に入ろうとしませんでした。さすがの父も、これには閉口しました。

インマヌエル（神丘）での生活のはじまり

そうした後のある日、やせた背の高いアイヌのおやじがマスを2本下げて来て、父の前に突き出し、これを買えとのことであります。父が何ほどかとたずねましたら、お金でなく米と交換しろとのことであります。米なら何ほどと言いましたら、3杯くれとのこと、さあその3杯が分からない。茶碗に3杯か、お皿に3杯か、でも、母は、やはり1升ますのことだろうと3升の米をやってしまいました。さあ、それが大失敗。あとで分かったのであります。その1杯というのは2合5勺のことであります。とぼしい中から3升の米をやってしまい、残り少ないので、お粥をすすりながらそのマスを刺身にして食べました。

そうして、翌7月の半ばの頃、少し強い雨が降ったと思いましたが、あの利別川が氾濫し、大洪水となりました。父は、こうしてはおられないぞと兄たちと水を漕ぎながら近くにあった細い木を切り集め、小屋の中に2尺くらいの高さの棚をつくりました、その棚の上に避難をしました。みるみる、どんどん増水するので母は、もうだめだ！みんな離れ離れにならないように、身体と身体を縛り合い、ともに死のうと覚悟をしたのであります。でも、床の上まで水が上がらないで、水は引けました。

その水が引けると同時に、母は産気をもよoshしたのであります。医者もなければ、産婆もない。困り切ったその時に、昨年、一昨年95歳で昇天されました天沼のおばあさん、当時29歳のおばさんが、産婆の経験は更にないのですが、何かと親切に世話をしてくれましたので、その棚の上で男の子を安産致しました。そうして、秋も濃くなりました頃、家中の者が全員サナダムシを出しました。私の場合なかなか出て来ないので、兄清太郎が棒切れにからませ、静かに出してくれました。それは、とても大きいので地面に引き出して見たところ12尺もありました。

いよいよ正月がきたのに餅をつくことが出来ませんので、兄常次郎は、3里向こうの鋸という部落（今の北檜山町字豊岡）九左衛門という農家がありまして、その九左衛門さんに頼んで粟の白を4升分けてもらって来ました。それで栗餅をつき、だしも何も入らない、ただの大根葉の味噌汁で栗餅の雑煮を作り、これを食べて元旦

をお祝したのであります。

雪解けを待って早々に開墾と蒔きつけに励んだのであります。夏ともなりましたら、蚊とブヨとの大群が襲撃し、日中でも農場の仕事が出来ないのでボロを縄にない、それに火をつけ、腰に下げて仕事をした。そうして夕方になるとヨモギ、その他の雑草を刈り集め、小屋の入り口でいぶすのでありますが、そんなことに少しも恐れず、小屋の中はワンワンとむれかえるほどでありまして、どうしても茶碗を持って食事することが出来ないので蚊帳の中で食事しました。おまけに 蚊のマラリヤ熱（オコリ）と言うのが流行しまして、親子3人、4人が枕を並べて、うめき苦しんだ場合もございました。こうした事は、1年や2年でなく、5年も6年も続いたのであります。その年もたびたびの水害と霜の早いので、作物は皆無の状態でありました。食料確保というので手櫓をこしらえて、雪の降るのを待って兄が鋸（北檜山町字豊岡）から芋を2俵も3俵も積んで縄をかけ、えんやら、えんやらと3日も続けて運搬したのであります。今日はいつもより帰りが遅いなあと話しておりました時に、「とった、とった、とったぞ！」と元気な声で帰って来ました。何を捕ったのかと飛びだしてみると、水かきのついた足の短い、丸太を短く切ったようなカワウソが俵の上に乗せてありました。それは当時、タマという男犬を飼っておりましたが、その犬がいつも兄の後について歩いていたのであります。その日、丹羽さんのこちらの沢に来たとき、その犬が川に飛び込み、カワウソと格闘し、ついにかみ殺したのであります。それを翌日調理しまして、近所の人たち4、5人を招いて試食の会をいたしました。

教会をつくろう

その翌年、まだ、どこの家でも冬の吹雪の夜など布団の上に1、2寸も雪が積もるといひどい小屋に住まっておりますながら、教会を建てようという相談が始まったのであります。そうして、めいめいが、急いで秋の農場をかた付け、6、7人の信者が心をあわせ、労力を持って建築に取りかかりました。いよいよ明日は、屋根葺きだという日に雪が降り始め、翌朝はかなり雪が積もってありました。時に父は、「ああ困った、わらじがきれてしまったし、履くものは無くて困ったなあ。」と母と話しておりました。そうした時に私が、学校へ行っておらず、退屈まぎれに、いたずら半分「つまご」という藁靴を作ってみました。その藁といいましても、絶対に手に入らないので夏の土用過ぎ野に生えておる“くど”という草を刈り取って、それを乾燥しておき、縄にない、わらじを作ったのであります。そのくどで大人の履く“つまご”を作ってみました。恥づかしいので、隠しておきました。父が困るというので、それを出してきて、父の前に出して履いてみなさいといいましたら、父は私の顔を見て、「よく、おまえこれを作ったなあ。ああよかった本当に助かった。」とたいそう喜んでくれました。その時の顔が今なお臉に浮かぶのであります。そうして年内に教会は落成いたしました。年あけて2月頃に簡単な落成式を行いたいとの話が出たのであります。何ぶんにも御馳走をこしらえる材料がなかったのです。その頃、兄が野うさぎをとろうと、いくつも罟をかけておきました。ちょうどクリスマスの朝、大きなうさぎが1羽とれましたので、兄が喜んで小屋の中に吊るしておきました。2、3の信者の方が私の家に集まって来て、これを見て、ことに山本助太郎氏（現在の山本起男氏の祖父）が、「これはよかった。これは神様の恵んでくれたのだから、与えられたのだから肉のご飯に作りましょう。」とただちに料理にかかり、ついでにたぬき汁ならぬ、兎汁も作るんだと、その肉を板の上に上げてガンガンとたたきつぶし、小麦粉を入れて汁を作ったのであります。できたから先に食べさせようと、子どもらといっても10人ばかりでありました。中でも大食漢の私と天沼卓美君と、このような御馳走は4年間この方、拝んだこともないので、めずらしいやら、おいしいやら、食うわ、食うわ、12、3杯も食べてしまいました。それで、あとから、食べる大人の分が足りなくなっていました。

第一利別尋常小学校（神丘）ができたが、教会で学ぶ

そうして14歳になった年に第一利別尋常小学校（神丘）という児童20人位より収容のできない学校としたものが建ちました。14歳にもなって、小学校1年生ではなあ、というのと、仕事をすれば1人前にできるのでありますから、とうとうその学校へは1日も行かずにしまいました。そうして青年となりましてから教会の牧師の転任、赴任、宣教師の送り、迎えを国縫まで10里の道を私が1人でやってきました。馬車で、駄馬で、櫓でしたのであります。ふしぎなことには、学問もなく、無知な、算数といえば算盤の持ち方も知らない本当に愚かな者を神様は教え導いてくれ、教会の役員としたものを35年続けました。ことに会計を担当すること21年、会計といひましても出入りが少ないので大したことは無かったのであります。一番辛かった事は、相良牧師さんをお迎えしてひと月の謝礼が6000円。終戦後むやみに物価が暴騰して1升瓶の空いたのが百円もしたというのに、5人ご家族が6000円のお金でどうして過ごしていられましょうか。でも、先生はこんな僅かなお金でどうするかということとは顔色だに表さず、私の差し出す6000円のお金をおし頂いて、「いつもこんなに心配して申し訳ない。」と頭を下げられたのであります。その都度、その都度、私は、涙のにじむほど辛かったのであります。というのは、私の家内は、骨髄という難関な骨の病にかかり、左の足を切断まで6年かかり、ついに13年にこの世をさりましたが、その間の医療費に山林15町歩、畑地7町歩を失ってしまいました。その上、山ほど借財が残り、どうにもならないのであります。ですから、自分が1銭も出さないで、信者の方々に「お前も献金しろ。あんたももつ

と献金を増やしてくれ。」と言いかねたのであります。

瀬棚の海津さん・天満さんとの出会い

昨日、瀬棚の海津さんと天満さんからお祝いの言葉に記念品を添えて招待致しました。本当に感謝の気持ちで一杯でございます。

思えば14年前の昔、相良先生が瀬棚方面に伝道を開始し、海津さんのお宅に30人、40人の子どもをあつめて火曜学校を続けておられました。ある火曜日の日、先生のおともをして海津さんのお宅にお邪魔致しました。時に海津さんでは、お寺の総代をなさっておられるにもかかわらず、キリスト教の牧師を招いて、しかも、2階の立派なお座敷2間を開放し、30～40人の子どもを集めての火曜学校を続けておられるので、私は何か不思議の感にうたれました。でも、ご夫妻ともに信仰にはいられバプテスマをお受けになられ、まことのクリスチャンとなって今日まで、大きなご奉仕を続けられたのに、私は敬服しております。この23年間神丘に定住し、困難と戦い、尽くして来られた遠藤栄牧師が73歳にして昇天されました。その牧師さんの石碑をたてたいと思いたちまして、適当な石材を物色しておりました。ある用件で三本杉に参りました時に役場の前に、高さ5尺たらず、幅は広い所で1尺8寸、厚さは5寸か6寸という本当に適当な石を目に入れました。こうした石なればなあとしばし見とれておりました時に、そばに薪を小割りしておった人が、「それは、役所の石ではありません。天満さんが、青年たちのために何か歌を刻んで橋の袂に建てるんだ、ここに置いてあるんです。天満さんに頼んだら分けてくれるのじゃありませんか。」と言ってくれました。その時天満さんがトンネルの方に向かって急ぎ足で通られました。その人は、「ああ、天満さんが通る。とめて、話してみたらどうですか。」と言ってくれましたが、急ぎの天満さんの足を止めて話をするのは、何か失礼でもあるような気がしてその日は帰宅した。後日、相良先生とご一緒に、海津さんのお宅に行き、海津さんにその話を致しましたら、「今晚、天満さんが集まりにくるのだから一緒に話をしましょう。」といってくれました。そうして集まりの済んだあと、天満さんをお願いしたら、「牧師さんの石塔を建てるのならあげますよ。」簡単に、しかも、ころよく、寄贈してくれました。私は、耐えられないほどうれしく感じたのであります。そうしたことが始まりでありましたが、天満さんも洗礼をお受けになられ、熱烈なる信仰をお持ちになって、手間も暇も惜しむことなく、ことに多額の私財をささげて社会のために大きなご奉仕を続けてこられました。こうした天満さんのご夫妻、天満さんが主に会って兄弟姉妹となり善き信仰の友となって頂きまして、大いに力づけられ、励まされておりますので本当に喜びに耐えません。感謝でございます。どうかこの先も、教会のため、地の栄のために、ご奉仕を続けて下さいますようお願いするものであります。

相良先生はじめみなさんに感謝

私が、心から信頼し、心から尊敬し、心から慕うて参りました相良先生には、ここ10数年、特に私を愛して下さいまして、何かと教え、助け、導いて下さいましたことは感謝にたえません。お礼の言葉もございません。どうかこれからも、長く、長く、この世ばかりでなく、限りのない天の御国にまで、良き先生であって、愛し、導いて下さいますよう心からお祈り致します。

石橋さんには、これまで何かと随分お世話になって、ついぞ言葉を巧みにしてお礼を申しあげたことはございませんが、心の中に絶えず感謝をしています。これからの私は、日に日に肉体が衰え、従って精神もまた鈍っていくのでございますが、どうか、旧来通りご愛顧賜りますようお願いいたします。

今日はありがとう

今日ここに集うてくれた、かあさんたちは、みんな揃って善良なよいかあさんたちばかり。そうして孫たちであるあんたたちみんな肉体は壮健であり、そうして一人として不良もなく、一人として悪党もなく、みんな素直な柔和な良い孫であるので、私は、この上ない喜びでありまして神様に感謝しているのであります。どうかこれから先き、言葉が、あんたたちのおこないが、全く主イエスキリストの御心にかない、神様に喜んでもらうことのできる立派な人間になってもらうよう願います。そうして切に切に神様にお祈りを捧げるものであります。みなさん、今日は本当にありがとうございました。

9. 第3回大日本帝国議会で北海道開拓事業が取り上げられる

明治25(1892)年5月2日、第3回大日本帝国議会が開催された。前年の12月25日わが国で最初の議会解散となった。内務大臣の品川弥二郎、次官の白根専一郎らが、全国の地方官に選挙大干渉を命じた。その結果、死亡者25名、負傷者388名に達した。与野党の対立が激化するなかでの議会開会となった。藩閥政治の弊害として、薩摩藩出身者が道庁の要職を占めていた北海道開拓事業がやりだまにあげられた。犬養 毅、尾崎行雄らは、改進黨に属し選挙大干渉を厳しく批判していたが、その2人が神丘に大土地の貸し下げを受けていたので世間の注目を集めた。この部分の議事録を資料4に示す。

資料4 大日本帝国議会議事録（大日本帝国議会誌1，1814pより）

明治25年5月10日

河野広中君，工藤行幹君より北海道殖民開拓に対する施政方針 北海道官有物払下げの件，北海道観業委託金処分の件，札幌製糖会社及び札幌製麻会社の件，北海道土地貸付の件，炭鉱鉄道線路変更の件に付政府へ質問書を提出せられたり

北海道土地貸付の件

北海道拓殖の業を挙げんと欲せば土地の貸下を便するより急務なるはなし然るに土地貸下願書の道庁に堆積するもの数万件の多きに及び甚だしきは三四箇年して尚未に指令を得ざる者あり之に反して或者は数百万坪以上の貸下を出願して容易に許可を得たり今其重なる者を挙げれば左の如し

一億五千万坪を三条實美外二名に 九百七十七万三千三百九十坪を鹿島万兵衛に 百八十九千四百五十七坪を摺口文造に 四十万坪を山田顕義に 百六十万坪を菊池武夫外十七名に 二百三十万坪を森本義質に 百二十七万六千坪を滝本五郎に 二千二十五万坪を犬養毅外八名に 三百万三千百五十を佐藤昌介に 一千万坪を岩谷松平に貸下たる等はなり

以上払下の現況は如何にして今後幾箇年にして開墾をなし得る見込なるか此払下地の内原地の儘他人に売買譲与せしものあるや否や

10. 北海道開拓政策の見直し

時の政府は，実情を調査して指摘のようなことがあれば改めることを約束した．そのためには開庁以来続いて来た薩摩出身の北海道長官でなく，他の地域からの起用が必要であった．第4代北海道長官は，長野県出身の渡辺千秋となった．この後を継いだのが北垣国道である．貸し下げを受けて開墾していない土地を調査してこれを返却させた．

11. 鈴岡への入植

明治29（1896）年に金原明善の小作人が主に石川県，福井県から移住した．この土地は，犬養 毅らが返却した土地であった．最初のころは，ここを北金原といていた．

12. まとめ

神丘の黎明は，近代立憲政治の確立期を色濃く反映していて興味がつきない．この小論は木俣 敏の『悠久なる利別川の流れ』に多くの示唆を頂きましたことに記して感謝を表する．

文 献

若林 功，1964，二 渡島半島の開拓異彩．加納 一郎 改定，北海道開拓秘録（3），時事通信社，43-90．

木俣 敏，1994，悠久なる利別の流れ．利別教会創立「百周年」実行委員会，284p．

今金町神丘地区開基百年協賛会編，1991，黎明一神丘地区開基百年記念誌一．313p．